

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

演劇で描かれる多民族国家の姿

滝口健



「NADIRAH」東京公演より。主人公のナディラ（中央）と親友のマズナー（右）＝photo by Tsukasa Aoki＝

毎年秋に開催される国際的な舞台芸術祭、フェスティバル・トーキョー（F/T）は、東京のアートシーンにすっかり定着した感がある。近年、F/Tはアジア地域から1カ国を選び、その国の注目すべき作品を特集上演する「アジアシリーズ」を展開しているが、その第3弾となった今年はマレーシアの特集が組まれることとなった。その中でひととき大きな注目を集めたのが、クアラルンプールに拠点を置くインスタントカフェ・シアターカンパニー（ICT）による公演『NADIRAH』だったと思われる。

この作品の主人公、ナディラはシンガポールの大学で学ぶマレー系シンガポール人。彼女の母親は中華系であり、マレー系の父親と結婚するためにイスラム教に改宗した過去を持つ。現在は離婚して女手一つでナディラを育てている母親に恋人ができたことがわかる。再婚をほのめかず母親を最初は祝福するナディラ。しかし、母の恋人は敬虔なキリスト教徒である中華系男性だった……。イスラムの教えに忠実であろうとする自分と、宗教よりも恋愛を優先する母親とのすれ違い。混血であるという出自と、マレー人としてのアイデンティティー。『NADIRAH』は多民族社会における主人公の苦悩と成長を優しいタッチで描き出していく。

今回の作品の大きな特徴は、マレーシアと、その隣国のシンガポールのアーティストたちがさまざまなレベルで互いに影響を与えながら作られたものだという点にある。作者のアルフィアン・サアットはシンガポールを代表する劇作家であるが、『NADIRAH』を書くにあたって彼が大きなインスピレーションを得た

のは、マレーシアの映画監督、故ヤスミン・アフマドの作品であった。ヤスミンは、多民族国家であるマレーシアの日常生活で人々が出会う文化や宗教の違いによる摩擦や対立に鋭い目を向けつつ、それでもなお共に生きる喜びを暖かく描いて大きな支持を得た。東京国際映画祭でも特集上演されるなど、国外でも高く評価された彼女が追いつけたテーマを、アルフィアンが同じく多民族国家であるシンガポールに舞台を移して作品としたのが『NADIRAH』であるとも言える。

ただ、ICTによる『NADIRAH』の上演にあたっては、シンガポールの劇団による初演時からさらに工夫が加えられている。マレーシアの劇団と共同作業を行うに当たり、アルフィアンはナディラの親友、マズナーの設定をシンガポール人からマレーシア人留学生に変更したのである。イスラムの教えに時にかたくななまでに固執しようとするナディラに対し、それとは対極的な態度を示すマズナー。マイノリティーとして、シンガポールの能力主義社会の中で自らのアイデンティティーと存在意義を示そうと苦闘するナディラと、マレーシア本国で享受していたマレー系優遇政策による特権をあっさり捨ててシンガポールにやってきたマズナー。彼らのやりとりを通じて、元は一つの国でありながら、過去50年間、異なる方法で多民族国家を作る実験を続けてきた両国におけるマレー人の意識や立場の違いが浮かび上がってくる。この変更により、『NADIRAH』はマレーシアとシンガポールという二つの国にまつわる物語としての性格をも色濃く持つことになったのである。

マレーシアとシンガポールのアーティストの共同作業によって、多民族国家における複雑な民族意識をこのように重層的に描き出すことが可能となった。そうした試みが演劇というメディアを通じて始まっていることを示したことが、今回の公演の最大の成果だったのではないだろうか。

< 筆者紹介 >

オンライン演劇アーカイブ『アジアン・シェイクスピア・インターカルチュラル・アーカイブ』副代表、翻訳エディター。ドラマトウルク、翻訳者。PhD（日本研究）。